（第三種郵便物認可）消費税込み定価１ヶ月3,000円・１部120円　日曜休刊

マイウェイ my way

ふるさと

南山大学学長　ミカエル・カルマノ

訳も分からず覚えた外国語

私は、自分の教育思想として自主的な学習を重視しており、大学の講義でもそのことを教えている。そんな私であるからこそ、物心ついた時から納得がいかなければ学ばない子供であったと思ってもらいたい気持ちもあるが、私にも、分からなくてもひたすらに覚えようとしたこともあった。

それは、小学校に入学する前、まだ字が読めないうち、叔母に当時ローマ・カトリック教会のミサで使われていたラテン語の祈りを教えてもらった時のことである（やはり、教育は学校から始まるものでない）。

筆者の故郷（2002年に筆者がセスナ機から撮影）

カトリック教会の一番大切な儀式は結婚式ではなく、「ミサ」という、荘厳な礼拝である。説教を含めて式の中心的な役割を担うのは神父であるが、その手伝いをするのは侍者と呼ばれている男の子である（侍者は英語で"altar boy"、文字通り祭壇でお手伝いする男の子の意である）。1960年代の半ばまでミサは世界中で全く同じ形、しかもラテン語で行われていたので、侍者の役割の一つは（信者の代表として）神父のラテン語の祈りに答えることであった―もちろんラテン語で。

その時は意味も分からずに祈りの台詞を暗記したが、私の記憶に残っているのはその祈りを唱えた厳粛なミサのことよりも、我々の遊び場となっていたリンブルク大聖堂の広場と、その隣にあった墓地であった。800年前に完成された大聖堂とリンブルクの城下町は、今ではすっかり観光地となり、1950年代の後半に民家や一般の商店であった所はほとんどお土産屋とレストランに変わったが、大聖堂に行く険しい道を上る度に昔の様子が頭に浮かんでくる。大聖堂の前にあったポンプを動かして水遊びしたこと。古い墓地を走り回り、鬼ごっこや隠れん坊をやったこと。墓地にある古い建物に住んでいた（当時の私の方から見れば）かなりお年の管理人を怒らせたり、彼に叱られたりしたこと。スクーターで急な坂を下りた時、ブレーキが効かなくなり壁にぶつかって大けがしたこと。

所々に想い出があり、何回訪れても飽きないふるさとではあるが、振り返ってみれば、その時にも、私をもっと大きな、グローバルな世界に結びつける、訳も分からないままで暗記した外国語があったのである。あの時のラテン語はずっと後になって勉強することになる日本語の前触れであったのかもしれない。